問題は当意即妙ですが、それに一寸変化を与えてやり直させるともう詰つてしまいます。

兎に角、人間の価値を智能テストで決めることは、誠にナンセンスでもあり、小学校としてもプライドをもつて、少くともそんなもので選衡の総てを行つてはいないということを、親たちに示して欲しいと思います。

テストを保育のカリキュラムの中に入れるということの良否についてはよく分りませんが、試験を目ざしてのものであれば、矢張り問題だと思います。人間のすることでありますから、その処理の仕方がまずければ、子供の、或いは親の競争心をよび起すことになりましょう。人をおとしめて、自分だけがのびよう、とする気持が養われるとすれば問題でありましょう。その点では既に、準備教育（試験勉強）に狂奔しているお母さんの心の中には、自分のところはしていない、という顔をしていて、他の子供たちを出し抜こうとしている人もあるのであります。

親の強制によつて、子供がどの様に被害をうけているか、二学期の終り頃になりますと顔色が悪くなつた、食欲が進まないなどの訴えで見えることが多くなり、補修教育をうけているということをきいて、成程と思わせられます。その際、少し勉強をやめたら、というと、母親はずい分うらめしそうな顔をしております。その他、頻尿、どもり、喊黙症のけいけんがあります。或いは妙なくせの始まつた子供もあります。勿論勉強を止めさせてなおつたのであります。こうした点、まだはつきりした研究がありませんので、今後の研究といたしましょう。

最後に一つ、幼稚園で補修教育を行つているのはどんなものでしようか。先生としてもその幼稚園から沢山名のある学校へ入つてくれることはうれしいことでもありましようが、それがもし営業政策と結びつくとすれば、或いはついているとすれば、教育者としては誠に情ない気持がします。殊に幼児教育の重要性が認められ、私共これから大いに仂いて、子供のためによい教育が行われるように努力している矢先、それにしみのつく様なことがあつてはと心配いたします。

五、幼年教育の立場から

周郷　博

ますます準備教育が、幼稚園その他の幼児教育の世界にはいりこんできている。その実状について、一々あげることはここではひかえるが、なぜ、こういう状態が生れてきたかについては、二、三のことを云つておかなくてはならないと思う。

原因の第一は、就職という狭い門がますます狭くなつてきていることについての不安、人間はだれでもその人間にふさわしい社会的位置をあたえらるべきで、たんに就職（金銭収入）ということだけでなく、社会的な自分に独特な役割をもちたい。この基本的な欲求が充たされそうもない、このことについての不安が高まり父母をいらだたせている。そこで、このいわば「生存競争」（資本主義的な）のしわよせが、下の幼児の世界まで及んできている。これが不健康な準備教育が、幼児の世界までしのびこみ幼児教育をむしばんでい

る最大の原因であろうと思われる。

第二に、社会の人だと、父母たちが、現存の（或いはこれまでの）教育機関――小学校から大学までをもとにしての教育を考えている。それ以外に、又はそれ以上に、教育とはどんなことかをいくらか考えてみているはずなのに、それは意識にのぼってこない、多忙と過労によって、ただただ大きなもの（現存のもの）に巻かれていってしまっている。よき明日への人間の成長を助けるという意味の教育を考えている余裕がない。必要な社会理論と児童理論をもつ余裕がないと云いかえてもよい。

第三には、幼稚園その他の施設を直接うごかしていっている園長や教師が、しばしば前にあげたとおなじような、古い或いは甘い表面的な教育の見方をしていることがあり、そのために父母の要求に従って、上級学校への準備教育をこの幼児の世界まで導入してしまう結果になっているからである。

準備教育がどの年令に於ても排斥すべきだという暴論には、にわかに賛成しがたい。準備教育がいくらかでも価値がある場合は、準備教育は準備教育として行われてよい。けれども幼児の世界にまで今はいりこんできている準備教育は、けっして、価値のある教育ではない。害の方が大部分だといえる。

現存の教育機構はたしかに教育として、大事な役割を果している。がまたそれは、現存の社会の悪を反映してできている教育の機構でもある。その現存の社会に、ただただ合せた教育を、まだ幼い未分化なあらゆる可能性をもち、芽をだし葉をひろげたばかりの幼い人々にまで及ぼして、型にはめ、知性が身体的なものによって訓練され、成長するはずなのに、伸びるべき芽を枯らして幼少な時代に偽善者にする。これは教育のために人間を殺すということに近い。

これは、機械時代における教育の悲劇であると云える。そこで一つには、私たちは幼児の身体と心の発達にかんする、最近の研究をよくきわめ、じかに観察し実験して、それらの研究をたしかめ、新しい正しい児童観（幼児観）をつかみ、この重要な教育を上からの支配から救わなくてはならない。がまた同時に、最近の心理学の教えるところに従って、積極的に小学校の低学年、二年までを、満七才までを含めて人間の教育のために新たな教育体系と、その教育の内容方法――カリキュラムの基本的な拠りどころを確立しなくてはならない。

機械時代をつくりだして、世界の歴史を近代の方向へとうごかし、さらにその機械時代のつぎに来るべき時代のために、重要な役割をはたすように活動しているとみてよい、イギリスの幼年教育の建て方に、学ぶことが必要だと思われる。

これは、幼児教育という部分的な問題でなく、これからの日本の社会の未来像を含んだ全般的な教育改造の礎をきづいていく仕事であり、勇気を要する仕事だと思われる。

× × × ×